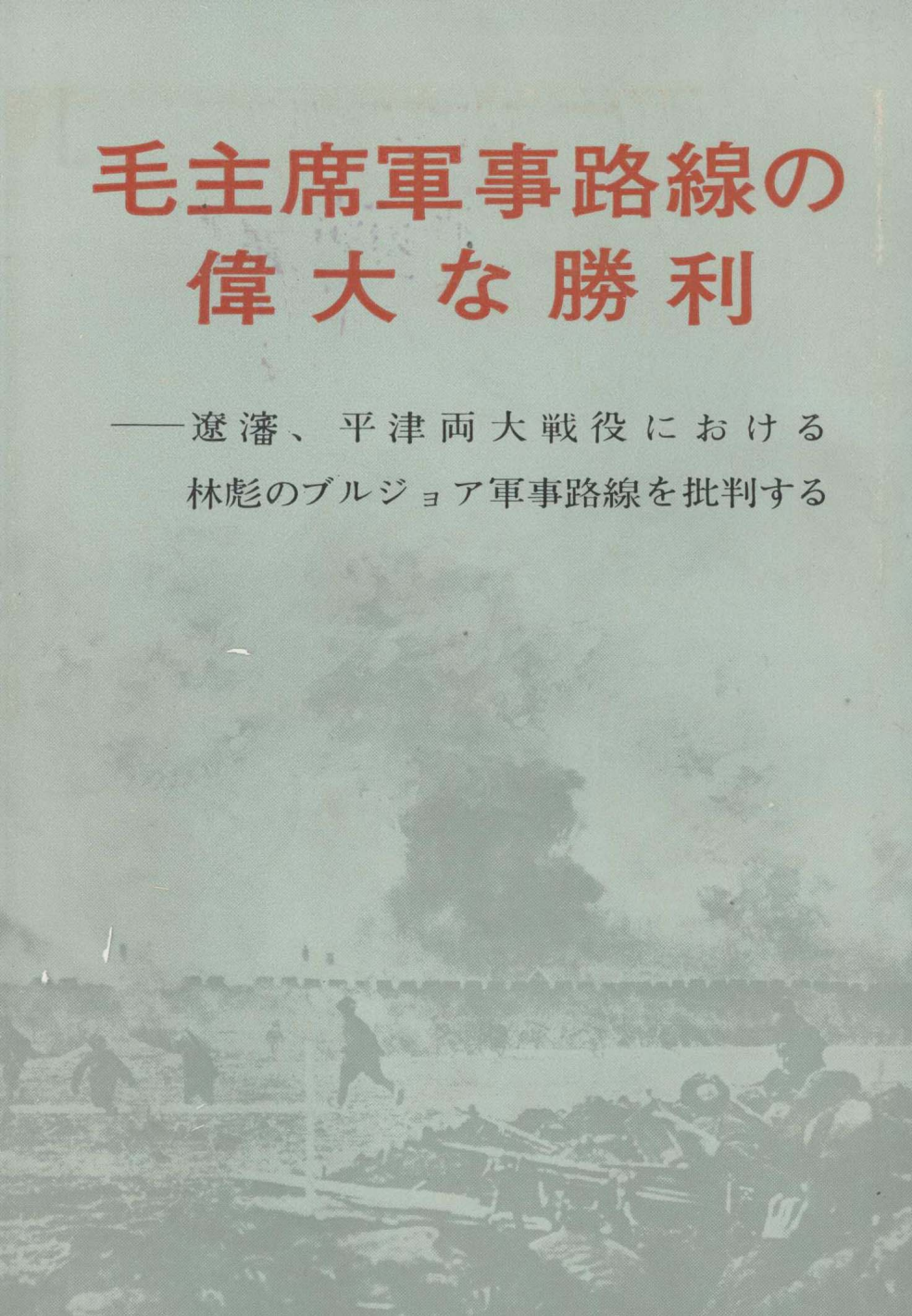
毛主席軍事路線の偉大な勝利

——遼瀋、平津両大戦役における林彪のブルジョア軍事路線を批判する



毛主席軍事路線の偉大な勝利

——遼瀋、平津両大戦役における
林彪のブルジョア軍事路線を批判する

詹時圃

外文出版社
北京

毛主席軍事路線の偉大な勝利

1976年 初 版 発 行　　定 価 140 円

出 版 者　　外 文 出 版 社
（北京阜成門外百万莊）

発 行 者　　中 国 国 際 書 店
（北京 P. O. Box 399）

取 扱 店　　東 方 書 店（東京）亜 東 書 店（東京）
中 国 書 店（福岡）（株）内山書店（東京）
（株）満 江 紅（東京）朋 友 書 店（京都）
（株）燎原書店（東京）中 華 書 店（東京）

編号：（日）3050—2666　　3—J—1386P
00065

毛主席軍事路線の偉大な勝利

——遼瀋、平津両大戦役における林彪のブルジョア軍事路線を批判する

第一章　遼瀋戦役における二つの軍事路線の闘争……1
一　遼瀋戦役の概況およびその戦略的意義……2
二　遼瀋戦役前の戦争の情勢
戦略的決戦にかんする毛主席の英明な決断……5
(一)　戦略的には敵を蔑視し、戦術的には敵を重視する……5
(二)　戦争の情勢はわが軍に有利となり、戦略的決戦の機はすでに熟した……8
(三)　戦略的決戦を東北戦場で開始すれば、緒戦の必勝を保証できる……16
三　遼瀋戦役における二つの軍事路線の闘争にあらわれた主要な問題……20
(一)　林彪は、北寧鉄道沿線まで南下して
その場で東北の敵を殲滅する勇気がなかった……21
(二)　林彪は、錦州を攻略して戦役の主動権をにぎることに反対した……35
(三)　林彪は、東北敵軍の海上の退路を断つことを拒み、
営口を制圧するために部隊を派遣しようとしなかった……53
四　遼瀋戦役の勝利は毛主席の軍事路線の勝利である……60

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第二章　平津戦役における二つの軍事路線の闘争……65
一　平津戦役の概況およびその戦略的意義……65
二　平津戦役前の戦争の情勢
迅速に平津戦役をおこすことの必要性と可能性……68
三　平津戦役における二つの軍事路線の闘争にあらわれた主要な問題……78
（一）林彪は、東北野戦軍はすみやかに山海関以南に進出せよ
という毛主席の指示に反対した……79
（二）林彪は、後続部隊は山海関から長城以内に入ってはならない
という毛主席の命令に違背し、反抗した……91
（三）林彪はまず南口を打つというまちがった主張を固執した……98
四　平津戦役の勝利は毛主席の軍事路線の勝利である……104
第三章　林彪のブルジョア軍事路線は、その右翼日
和見主義の政治路線に奉仕するものである……113

第一章　遼瀋戦役における二つの軍事路線の闘争

偉大な指導者毛主席と中国共産党中央の指導のもとに、中国の批林批孔運動は、現在、幅広く、深く、持続的にくりひろげられている。毛主席のプロレタリア軍事思想と軍事路線をしんけんに学習し、林彪のブルジョア軍事路線をほりさげて批判することは、批林批孔運動の重要な側面の一つである。

林彪のブルジョア軍事路線は各方面にわたってあらわれており、そのもたらした危害もひじょうに大きかった。一九五九年、林彪が中国共産党中央軍事委員会の日常活動を指導するようになってからは、そのブルジョア軍事路線はさらに整ったものとなり、そのもたらす危害もいっそう大きくなった。

林彪およびその一味は、党をのっとり権力をうばいとるための反革命的な必要から、ほしいままに歴史を改ざんし、こともあろうに、中国人民解放戦争の戦略的決戦は林彪が「いちばん先に

起こした」ものだ、遼瀋戦役の勝利は林彪の「英明果断な指揮」によるものだ、などと宣伝した。かれらはさらに、林彪を「天才的な軍事家」、「戦略家」、「不敗の将軍」などともちあげた。こういった化けの皮は、かならず徹底的にはぎとらなければならない。

本文は、おもに遼瀋戦役と関係ある歴史的事実をとおして、この戦役のなかで、毛主席のプロレタリア軍事路線がどのようにして林彪のブルジョア軍事路線にうちかち、戦略的決戦の最初の戦役の偉大な勝利をおさめたかを説明するものである。

一　遼瀋戦役の概況およびその戦略的意義

遼瀋戦役は、中国人民解放戦争における戦略的決戦の最初の大戦役である。この戦役は、東北地方のわが軍先遣部隊が北寧鉄道沿線（北平＝遼寧省瀋陽）に到着して、敵軍と接触した一九四八年九月十二日にはじまり、戦役終了の一九四八年十一月二日まで、五十二日間にわたっており、三つの段階にわけることができる。第一段階――九月十二日から十月十九日まで。この段階で、わが軍は錦州を攻略、敵軍十二万余人を消滅①、錦州の敵、「東北匪賊討伐総司令部」副総司令范漢傑を捕虜にし、東北敵軍の陸上退路を遮断するという戦果をおさめた。このため、長春

十余万人の敵軍は、一部が蜂起し、他の大部分が降伏せざるをえなくなった。この降伏者のなかには、敵の「東北匪賊討伐総司令部」のもう一人の副総司令鄭洞国もはいっていた。第二段階――十月二十日から十月二十八日まで。この段階に、わが軍は遼寧省西部の黒山・大虎山地区で、瀋陽から錦州へ増援にきた敵一コ兵団、五コ軍団、十二コ師団、計十万余人を消滅した。第三段階――十月二十九日から十一月二日まで。この期間、わが軍は瀋陽、営口を解放し、敵軍約十五万人を消滅した。こうして、全戦役をつうじて、わが軍は国民党軍の一コ「匪賊討伐総司令部」、第一、第六、第八、第九の四コ兵団本部、十一コ軍本部、三十六コ正規師団、若干の非正規師団およびその他の遊・雑武装力など合計四十七万余人を殲滅し、瀋陽、長春、錦州など十四の都市を奪回し、東北全域を解放した。

一九四八年七月一日から十一月二日にかけて、わが軍はその他の戦場でも一連の勝利をかちとっていた。山東戦場では津浦鉄道（天津＝浦口）中部区間戦役と済南戦役の勝利を、中原戦場では睢杞戦役と襄樊戦役の勝利を、華北戦場では山西中部戦役の勝利を、西北戦場では澄邵戦役の勝利をかちとった。これらの戦役と遼瀋戦役で、わが軍は一九四八年七月一日から十一月二日の四ヵ月間に、敵軍百万人を消滅したので、敵味方の力関係には根本的な変化が生じた。すなわち、国民党軍は約二百九十万人に減り、わが軍は三百余万人にふえたのである。一九四八年十一

月十四日、毛主席は『中国の軍事情勢の重大な変化』という文章のなかで、「中国の軍事情勢はいまや新しい転換点にたっした。すなわち、戦争する双方の力関係に根本的な変化が生じたのである。人民解放軍は、質のうえではやくから優勢をしめていたが、いまでは数のうえでも優勢をしめるようになった。これは、中国革命の成功と中国における平和の実現がすでに間近にせまっていることをしめすものである」と指摘している。さらに毛主席はつぎのように指摘した。「こうして、われわれが当初予測していた戦争の進行過程は、いちじるしく短縮されることになった。当初の予測では、一九四六年七月からおよそ五年前後の時間があれば、国民党反動政府を根本的に打倒できることになっていた。いまになってみると、これからあと一年前後の時間があれば、国民党反動政府を根本的に打倒することができる。」一九四九年十月一日、中華人民共和国が成立したのは、毛主席がこの文章をかかれてから一年たらず後のことであった。戦争の実際の進行過程は、毛主席の論断の正しさを完全に立証している。

遼瀋戦役は淮海戦役、平津戦役とともに、解放戦争の戦略的決戦段階を構成している。この三大戦役をへて、国民党軍の主力はほとんど消滅された。わが軍はこのときから、全国的範囲にわたる戦略的追撃にうつり、全国人民の支援のもとに、まもなく中国大陸を解放したのである。

二　遼瀋戦役前の戦争の情勢

戦略的決戦にかんする毛主席の英明な決断

（一）戦略的には敵を蔑視し、戦術的には敵を重視する

毛主席は、「**われわれは戦略上ではいっさいの敵を蔑視しなければならず、戦術上ではいっさいの敵を重視しなければならない**」とのべている。戦略的立場からいえば、すべての反動派はハリコの虎であり、みたところ、おそろしそうだが、実際にはたいした力はもっていない。ながい目で見、歴史的に見れば、ほんとうに強大な力をもっているのは、反動派ではなくて、人民である。われわれの戦略的思想は、この観点をふまえて打ち建てられなければならない。もし、われわれが戦略的に、全体において、敵を蔑視せず、それをうち倒す勇気がなく、それと闘争し、果敢に勝利をかちとる勇気がなければ、われわれは右翼日和見主義のあやまちをおかすことになる。だが、戦術的にいえば、すべての反動派はまた、本物の虎であり、個々の具体的な闘争においては、われわれは敵を重視し、闘争に長け、闘争の芸術を重んじなければならない。われわれの戦術的思想は、この観点をふまえて打ち建てられなければならない。もし、われわれが戦術的

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に、個々の部分において、敵を重視せず、慎重な態度をとらなければ、われわれは「左」翼日和見主義のあやまちをおかすことになる。

戦略的には敵を蔑視し、戦術的には敵を重視する――これは毛主席の偉大な戦略思想であり、われわれが敵にうち勝つ強力な思想的武器である。何十年このかた、われわれは毛主席のこの偉大な戦略思想にしたがってきたからこそ、国内外の強大な敵をうちまかし、革命と建設事業の偉大な勝利をかちとったのである。

一九四六年六月二十六日、蔣介石匪賊集団は全国的規模の反革命戦争をひきおこした。同年七月二十日、毛主席は、『自衛戦争によって蔣介石の進攻を粉砕せよ』という文章のなかで、政治、経済、軍事などの面から敵味方の状況を分析して、つぎのように明確に指摘した。「**蔣介石にはアメリカの援助はあるが、人心が離反し、士気はあがらず、経済は困難におちいっている。われわれには外国の援助はないが、人心が集まり、士気はあがり、経済も自信がある。したがって、われわれは蔣介石にうち勝つことができる。**」一九四七年十二月二十五日、毛主席は中国共産党中央の会議で、『当面の情勢とわれわれの任務』と題する報告をおこなった際、当時の国際・国内情勢を深くほりさげて分析し、さらにつぎのように指摘した。「**蔣介石の軍事力の優勢は一時の現象にすぎず、一時的に作用する要因にすぎない、アメリカ帝国主義の援助もまた一時**

的に作用する要因にすぎない、それにひきかえ、蔣介石の戦争の反人民的な性格、人心の向背は、恒常的に作用する要因であり、この面では、人民解放軍が優勢をしめている」と。それと同時に、毛主席は、「われわれは、自己の内部にあるあらゆる軟弱無能な思想を一掃しなければならない。敵の力を過大評価し、人民の力を過小評価する見方はすべてあやまりである」と全党を戒めている。果敢にたたかい、果敢に勝利をかちとるという毛主席の英明な論断、およびわが軍の長期にわたる作戦の経験にもとづいて毛主席の提起した「十大軍事原則」②は、実践によって、このうえなく正しいものであることが立証された。

毛主席の戦略思想に指導されている中国人民解放軍は、毛主席みずからの指揮のもとに、解放区人民の積極的な支援をうけて、戦争の第一年目、つまり一九四六年七月から一九四七年六月までの間に、すでにいくつかの戦場で蔣介石軍隊の進攻をうちやぶった。そのため、敵は戦略的進攻から戦略的防御に転ぜざるをえなくなったし、わが軍は戦略的防御から転じて戦略的進攻にうつった。戦争の第二年目、つまり一九四七年七月から一九四八年六月にかけて、国民党軍はわが軍の一連の打撃をうけて、全面的防御から区域的防御へ（一九四八年八月には、さらに区域的防御から重点的防御へ）と転じた。わが軍は二年にわたる困難にみちた戦いをへて、敵軍二百六十四万人を消滅し、すばらしい情勢をむかえたのである。

裏切り者、売国奴の林彪は、右翼日和見主義の立場に立ち、観念論と形而上学的反動的世界観から、つねに敵の力を過大評価し、人民の力を過小評価し、敢然と敵とたたかい、勝利をかちとる勇気がなく、極力、毛主席の戦略思想にさからった。毛主席が毅然として、まず東北地方で国民党軍隊と戦略的決戦をくりひろげ、遼瀋戦役を開始すると決定したとき、林彪はあらゆる手管を弄して、毛主席の偉大な戦略的決断に反対し、これを破壊しようとした。毛主席はただちに林彪の右翼日和見主義路線を真っ向から批判し、戦略的には敵を蔑視し、戦術的には敵を重視するという思想で全党、全軍、全国人民を武装した。こうして、まもなく東北解放戦争と全国解放戦争の勝利がかちとられたのである。

（二）戦争の情勢はわが軍に有利となり戦略的決戦の機はすでに熟した

解放戦争が第三年目にはいった一九四八年七月、解放区の面積は二百三十五万平方キロにひろがり、全国総面積の二四・五パーセントを占めた。解放区の人口は一億六千八百万にたっし、当時の全国総人口の三五・三パーセントを占めていた。解放区内の県以上の都市は五百八十六をかぞえ、全国県以上の都市総数の二九パーセントであった。解放区の鉄道はすでに一万二千八百四

十七キロにたっした。このほか、解放区にかなりの規模の鉱山と工業をもつようになった。この時期、敵は、人口、土地面積、都市などの数のうえではまだ一時的に優勢を占めていたが、両者のひらきは戦争勃発当初のように大きなものではなくなった。政治、経済、軍事の面で、わが方の状況はますますよくなり、敵の状況はますます悪化していった。

政治の面では、劉少奇の形は「左」、実際は右の日和見主義路線による妨害を排除してのち、解放区の土地改革運動がいっそう広はんにくりひろげられて、およそ一億の人口を擁する区域で、この偉大な生産関係の変革が徹底的になしとげられたのである。これによって、広はんな大衆の階級的自覚と、解放戦争支援の積極性が大いに高まった。「保家保田」（家を守り、田を守る）というスローガンのもとに動員され、組織された広はんな人民は、食糧を輸送し、民工となり、あるいは入隊して戦争に参加した。人員を必要とすれば人員をおくり、物資を必要とすれば物資をおくり、前線支援の高まりは急速にもりあがった。この期間、中国共産党は土地改革と結びつけて、全党の整頓運動をくりひろげ、党を大いに発展させ強固にし、党と広はんな大衆との結びつきをいっそうつよめた。一九四八年の秋には、中国共産党の党員は、一九四五年の百二十一万人から三百万人に増加し、同時に党内に若干存在していた階級構成の不純、思想の不純、作風の不純などのよくない現象が基本的に克服され、マルクス・レーニン主義の理論水準と

政策水準が高まった。毛主席は一九四八年四月一日におこなった、『山西・綏遠解放区幹部会議での演説』のなかで、山西・綏遠解放区の土地改革活動と整党活動の偉大な成果にふれたとき、土地改革と整党という基礎があったからこそ、「**山西・綏遠解放区の党組織はこの一年間に大がかりな軍事上の後方勤務をなしとげ、偉大な人民解放戦争を支援することができた**」と指摘している。これは、山西・綏遠解放区の土地改革活動と整党活動にたいする評価であるばかりでなく、あらゆる解放区の土地改革活動と整党活動にたいする評価でもある。解放区の状況と相反して、このとき、国民党反動派は政治的にきびしい危機にみまわれていた。蔣介石反動派の内戦政策およびアメリカ帝国主義の独占資本と蔣介石の官僚買弁資本との密接な結託によって、中国人民はむごい搾取と抑圧をうけ、その財産は略奪され、蔣介石支配区の広はんな勤労人民の生活は日ましに悪化しつつあった。このような情況にうながされて、人民大衆は一致団結し、飢餓反対、迫害反対、内戦反対、独裁反対、売国反対の勢いさかんな大衆的闘争に立ちあがった。なかには、武器をとって蔣介石政権と武装闘争をくりひろげるものもあった。統計によれば、長江以南の広大な農村では、中国共産党の指導する遊撃武装力が三万余人にたっしていた。二年間の戦争をへて、中国共産党の指導する反米反蔣の民族民主統一戦線も、大きな発展をとげた。多くの民主党派、民主人士、大衆団体は、蔣介石反動派の反動的本質をいっそうはっきりと見ぬ

き、中国共産党の政治的主張に賛成して、中国共産党の指導する反蔣闘争の隊列に加わるようになった。一口でいえば、この時期の蔣介石国民党反動派は、二つの戦線――一つはわが方との正面の戦場、いま一つは蔣介石支配区人民の反蔣闘争――によるはさみ撃ちにあって、その反動的支配はますます維持しにくいものとなった。

経済の面でも、解放区と蔣介石支配区はまったく相反する状況にあった。毛主席は、一九四八年の夏、「**軍隊が前進して、生産は増大し、規律性が強化されて、革命はかならず勝利する**」という有名な詩を発表した。この詩は、実質的には、解放区の活動方針であった。つまり、軍隊はひきつづき国民党支配区にむけて進軍し、戦略的進攻の任務を執行する。解放区はひきつづき生産を大いに発展させて前線を支援する。以上の二つがなしとげられ、それに加わえて、全党、全軍の規律が強化されるならば、われわれはかならず全国革命の勝利をかちとることができるというのである。毛主席のこの方針にみちびかれて、土地改革はすでになしとげられ、さらに戦争の主要な戦場が蔣介石支配区にうつったという有利な条件が加わわったので、解放区の工、農業生産は急速に発展し、それにつれて人民の生活も改善され、経済状況はすばらしい様相を呈していた。蔣介石支配区をみると、これとは全くちがっていた。国民党反動派の内戦・売国政策は、通貨の悪性インフレをまねき、紙幣価値はいちじるしく下落し、物価はうなぎのぼりに上昇をつづ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com